

近代短歌の二つの軸—奥田亡羊

二つの短歌雑誌の十一月号で二人の近代短歌の巨人の特集が組まれた。一つは「歌壇」の「斎藤茂吉『赤光』刊行百年をめぐつて」、もう一つは「短歌往来」の「佐佐木信綱（没後五十年）」である。それぞれ新しい視点で歌人を分析する優れた特集で、近代短歌史の捉え方が変わりつつある今を感じさせる内容だった。

「歌壇」の「赤光」特集では、花山多佳子、小池光、品田悦一による鼎談「『赤光』とは何だったのか」に教えられることが多かった。誰もが読み、誰もが知り尽くしているはずの『赤光』の新しさを一首一首の表現にまで立ち返って検証している。花山は「赤き池にひとりぼっちの真裸のをんな亡者」の泣きぬるところなどにも見られる「ゐる・ゐたり」は口語を文語化したもので、正岡子規に先例はあるものの「赤光」で茂吉が使い出してはじめて一般化した表現なのだという。また品田は、「めん鶏ら砂あび居たれひつそりと剃刀研人は過ぎ行きにけり」などの「こそ」を抜いて已然形で結ぶ形も、万葉集の使い方とは違い、茂吉が編み出した表現であるという。いずれも今では歌人がごく普通に使っている表現だ。それが茂吉の独創であったという指摘は新鮮だった。小池は鼎談の結びで「年代順に並べたことも、お医者さんが歌集を出したのも、母の死を一連の連作として書いたのも初めてであると『赤光』の新しさを列举している。花山も指摘するよう

に、これまで茂吉の歌を評価する一つの基準は「無意識のすごさ」にあった。しかし、そうした視点が逆に茂吉が意図的に試みた方法を見えてくることもある。近代短歌における茂吉の果たした役割を今いちど確認すべき時期に来ているのだろう。

一方、「短歌往来」の佐佐木信綱特集には藤島秀憲、小川靖彦、盛田帝子、渡英子、森本平らがそれぞれ歌人、古典和歌の研究者としての信綱に光を当てた優れた論考を寄せていく。それらを俯瞰して思うのは、信綱の生涯が短歌の歴史そのものであるということだ。信綱という歌人を語るとこれまでの短歌史が揺らぐ。たとえば盛田の「佐佐木信綱と近世和歌研究」は信綱が近世和歌史の確立に果たした役割を論じたものであるが、この論考は同時に近代短歌の始点がどこにあるのかという問題をわたしたちに投げかけている。近世と近代が信綱においては地続きなのである。このことは信綱の和歌研究と短歌創作がどのように結びついていたかを論じた小川靖彦の「佐佐木信綱の萬葉学と短歌制作」でも論じられており、小川はこの論考で「近代的な『短歌』を『和歌』の〈変革〉ではなく、時代に応じた〈発展〉と捉えるのが信綱の文学史観であつた」と指摘している。藤島の「佐佐木信綱のとき三十一歳にして」は、『思草』出版後の信綱の創作や結社に対する意識の変化をたどる評伝的な内容だが、信綱という存在を通して時代や当時の文壇の空気がありありと伝わって来る。信綱の生涯をたどつてゆくと近代文学の生きた歴史が立体的に見えてくる予感がした。

時を同じくして茂吉と信綱に新しい光を投げかける特集が組まれたわけであるが、この二人が今後の近代短歌の歴史を考える基軸になつてゆくに違いない。